

#01 ハイブリッドカー開発責任者

Chief Engineer

ハイブリッドカーを 身近な存在にすることが 最大のテーマでした

株式会社本田技術研究所 四輪開発センター 主任研究員 新型インサイト開発責任者

>>この仕事に就いた経緯

子どもの頃からクルマが大好きで、中学時代から自動車雑誌のメカニカルな記事を読んでいました。創業者本田宗一郎の著書も読み、その人柄やホンダの社風にあこがれ、高校の時にはもうホンダのエンジニアになろうと決めていました。大学では機械工学科で熱流体工学の研究に携わりました。

>>現在の仕事内容

入社以来、エンジンの研究開発部門に所属し、VTECの制御仕様をはじめ、超低公害車のパワーユニット、グリーンディーゼルなど、低公害・低燃費エンジンの開発に従事しています。今こそ、クルマも環境問題抜きには考えられない時代ですが、20年以上前から排出ガスをきれいにする、燃費を向上させCO₂を削減するといった環境技術の開発に取り組んでいます。例えば1970年に米国でマスキー法ができました。これは大気汚染防止のため、クルマからの窒素化合物などの排出量を90%以上削減しようという法律です。当初、規制値が厳しすぎて実現は困難と言われていたのですが、72年ホンダは世界で初めてCVCCエンジンでクリアしました。私は最後のCVCCエンジン開発にもかかわっています。

そして、06年1月からはハイブリッドカー、新型インサイト開発の責任者となりました。

ハイブリッドカーとは、エンジンとモーターを組み合わせたクルマのこと。従来のガソリン車に比べて低燃費のため、CO₂排出量を抑えた環境に負荷の低いエコカーとして注目を集めています。新型インサイトはホンダ独自のハイブリッドシステムで、低燃費と排出ガスのクリーン化を実現、環境負荷物質使用量の削減やリサイクルに配慮した設計など、あらゆる面で環境への対応を追求しています。特にこの開発でこだわったのは、手頃な価格のクルマにすること。環境に優しい技術を詰め込んでいくとどうしても高価格なクルマにならざるを得ない。でも、エコカーはより多くの人に乗ってもらわなければ意味がないんです。だから、コストを可能な限り下げるなどを念頭に置きながら開発を進めてきました。その一つが排出ガスをクリーンにするための排ガス浄化装置のプラチナ。10年ほど前には、1台あたり20グラム使っていたのを1グラムにまで抑えました。少量にすることで、価格にもメリットが生じます。つまり、エコカー普及のための技術開発も大きなテーマというわけです。

>>この仕事のやりがい・おもしろさ

排ガス規制は各国異なりますし、規制がより厳しくなった時点でそれは開発者にとって新たな、未知の領域になります。さらに、それをクリアするエンジンを開発しても、それだけで商品化できません。どな人が乗っても快適で、どんな使い勝手にも対応できるクルマに仕上げていかなくてはいけない。でも、そこが量産車の技術開発の難しさであり、おもしろさだと思っています。新型インサイトも今年2月に発売になったものの、決してこれがゴールではありません。まだまだ排出ガスの浄化性能は高められるし、燃費も向上できる。さらに環境に優しいクルマを目指して改良を続けていきたいと思っています。

それと、開発者としての喜びとしては何といっても自分の手掛けたクルマが世の中を走ることです。これほどうれしいことはありません。今も街で見かけるたびに感動しています。

>>目指す人たちへのアドバイス

今から環境やクルマの知識を身につけようと思わなくてもいいと思います。それよりも、高校生としてちゃんと生きて、今しかできないことに挑戦してほしい。また、ホンダは、自分で何でもやってやろうという意気を持った人間が多いです。自分をきちんと主張できる人に向いている会社だと思います。

#02 環境コンサルタント

Consultant

企業活動を通して 社会にインパクトを 与えられる仕事です

株式会社イースクエア

>>この仕事に就いた経緯

周りが当たり前のように大学へ進学する高校で、何のために大学に行くのか悩んだ時期がありました。それで、せっかく大学へ行くなら社会的な問題に取り組みたいと思うようになり、当時、よく報道されるようになっていた環境問題をテーマに選んで、政策科学部に進みました。ここは、問題を発見して解決する手法を実践的に学ぶ学部でした。

大学では、環境問題と都市政策をメインに学んだほか、環境系のサークルに入ったり、環境系のNGOや企業でインターンをしたりもしました。在学中の97年には、京都で行われた国際会議で「京都議定書」が議決されました。私は会場内のアシスタントのアルバイトをしていて、最後の審議の様子をずっと見ていました。国際交渉の場だけでなく京都中が盛り上がり、この分野が大きく変わっていくことを実感しました。ただ、当時は海外に比べて環境問題に対する国内の関心が低かったので、いろいろな取り組みを広く伝えるような仕事がしたいと考えて、広告代理店に入り、その後、今の会社に入りました。

>>現在の仕事内容

現在は、企業の環境部門や経営企画部門などをお客様として、環境やCSR(企業の社会的責任)について、会社がどういう方向性で何をやっていくのか、一緒に考える仕事をしています。健全で持続可能な地球環境と社会づくりに貢献することが、企業の競争力を高める、というのが当社の考え方です。業務内容は幅広いのですが、例えば環境報告書という、自社の環境に対する活動をまとめた冊子を作りたいという相談があれば、お話を聞き、どのような内容を盛り込むべきか提案します。ただ単に情報をまとめるのではなく、活動の内容に改善案を出したり、10年後、20年後のビジョンを策定したりといったコンサルティングも行います。提案のために競合他社の活動や海外の事例などの調査も必要で、そのリサーチ業務にかなり時間をかけていますね。集めた情報を編集して会員企業に提供する、シンクタンクのようなサービスも行っています。

>>この仕事のやりがい・おもしろさ

お客様によって分野も違うし悩みも違うので、毎回仕事を作っていく醍醐味があります。もちろん、お客様も悩んでいるから相談されるわけで、答えは簡単に出ません。どういう段階を経て解決に導くのか、ずっと考えている状態です。でも、自分の興味のあることと仕事で考えなくてはいけないこの方向性が同じなので、変なストレスはありませんね。

もう一つ、社会に対するインパクトが大きい点にもやりがいを感じます。大きな企業だと世界中に何万人も従業員を抱えています。一つの企業の環境に対する指針を作ると、それが全世界に適用されていく。特に日本は、企業が先行して変わることで社会が変わっているところなので、企業を通して環境問題への意識を高めていきたいです。

>>目指す人たちへのアドバイス

考えているだけとか、見たり聞いたりしているだけでは、やりたいことはわからないのではないかでしょうか。ボランティアやアルバイト、インターンなどをして、現場の中でやってみたり感じたりすることが重要です。

コンサルタントを目指すなら、考える力を養ってほしいですね。知識や情報はインターネットで検索できる時代ですから。私の場合、大学の問題解決アプローチの授業やディスカッションの時間が、今役に立っています。大学に入ると、体系的に物事をとらえて分析するとか、論文を書くということを学べるので、しっかり身につけるといいと思います。

#03 インタープリター

Interpreter

常に人と自然が相手。 どちらもおろそかに しないよう心がけてます

財団法人キープ協会 環境教育事業部 キープ・フォレスター・スクール

>>この仕事に就いた経緯

大学卒業後、アルバイトで入ったアウトドアショップが、登山のツアーを企画し、実施していました。何度かアシスタントとして参加しているうちに、自然の中でガイドするって気持ちよさう、いいなと思ったんです。とはいって、自然の知識もガイドの経験もありません。いきなり現場へ飛び込むより、基礎知識だけでも身につけたいと思い、日本環境教育フォーラム主催「自然学校指導者養成講座」をネットで見つけて受講。その講座のカリキュラムの一つ、インターンシップで選んだのが今の勤務先、財団法人キープ協会です。受講終了後、キープ協会の臨時職員となり、08年4月から正職員になりました。

>>現在の仕事内容

キープ協会環境教育事業部は、八ヶ岳の麓、清里高原にあり、あらゆる世代を対象にした自然体験型環境教育プログラムと、環境教育指導者の養成などを展開しています。私はインターパリター(自然解説指導員)として、子どもたちを森へ案内し、自然生態系や植物、動物の説明をしたり、自然観察やネイチャーゲームを楽しんでもらったりしています。学生や社会人を対象に指導者養成のためのセミナー講師をすることも多いです。参加者や目的、日程、予算などに合わせてそのつどプログラムも作成、一つひとつがオーダーメイドになります。企画から運営、実施すべて一人で担当することも多いです。

>>この仕事のやりがい・おもしろさ

インターパリターは人と自然の橋渡し役と言われていますが、人と自然、両方を相手にできるところが一番おもしろいです。どちらも“生もの”だけに、どんなに準備して臨んでも、なかなか思い通りにはいきません。そこをどう乗り切るかが難しいのですが、同時に楽しさもあります。

キープ協会は自然体験学習やエコツアーはもちろん、ヤ

マネという動物を通して環境を調査研究したり、企業における環境活動のための企画・運営、教員のための環境研修など、実際に様々な観点から環境教育に取り組んでいるのが魅力です。どのスタッフも自分の得意分野を生かして仕事できる体制になっているのもいい。私はハイキングや登山が大好きなので、その要素を盛り込んだプログラムを担当することが実際多いんです。

たまにインターパリターって実はとても“おせっかい”な仕事なのかもしれないと思うことがあります。すべての人が環境や自然のすばらしさに気づいていれば、わざわざ私たちが説明する必要はないわけですから。でも、今は自然と接する機会が減っているからこそ、一人でも多くの人に「自然に触れるのっておもしろい!」と気づいてもらう必要がある。そこに私たちインターパリターの役割があると思っています。

>>目指す人たちへのアドバイス

実は、高校時代は心理学や教育に関心がありました。大学は「広く何でも学べそうだから」と社会学を専攻。入ってから「教育へ行けばよかった」と後悔したこと也有ったのですが、実は社会学ならではの物の見方とか組み立て方が今非常に役に立っています。また、就職活動に失敗し、数年、アウトドアショップでバイトをしていたわけですが、そんな自分の経験を生かし、いつか学生をサポートするプログラムを実現したいと思っています。つまり、どんな経験もこの仕事では役立つわけです。何でも得意分野として生かせるので、環境に直接関係なくとも興味のあることを一生懸命やってほしいです。また、決して一人ではできない仕事だし、様々な人と関わるのでコミュニケーション力が大切。その力を身につけるためにも多様な価値観を持つ友達を作つておくといいと思いますよ。

#04 環境行政職

Government Worker

地球環境問題に 実践的に取り組めるのが 地方公務員の魅力です

滋賀県 琵琶湖環境部環境政策課 温暖化対策室 主事

»この仕事に就いた経緯

高校時代は特に「これがやりたい」という明確な将来像はありませんでした。ただ、得意の英語を将来につなげられたらと思い、大学では国際法を専攻しました。ゼミで取り組んだ国際環境法がおもしろく、より専門的に学びたいと考え、大学院では水資源問題の研究に取り組みました。「水」をテーマにしたのは、琵琶湖があり、水資源が常に身近な課題だった滋賀県で育ったのが大きかったと思います。

その後、学生時代に培った専門知識を生かして環境に関わる仕事がしたいと考え、選んだのが滋賀県職員です。企業に入って利益を追求するよりも、純粋に公共利益のために力を発揮する仕事が自分に合っている気がしたからです。

»現在の仕事内容

琵琶湖環境部は、琵琶湖の総合保全や環境と調和した持続可能な社会づくりを推進するセクション。その中の温暖化対策室に所属し、主に省エネ・省資源などエコライフにどう取り組んだいいのかを県民に普及・啓発する活動に取り組んでいます。

その一つが08年11月に立ち上げたサイト「みるエコおう

み」。これは、毎日の生活で実践した省エネ・省資源行動でどれだけCO₂が減らせたのか、グラフや数字で具体的に見えるというもの。現在、登録してくださっているのが約1700世帯。地元企業やメディアの協力もあって、認知されつつあります。

また、滋賀県地球温暖化防止活動推進員のボランティアの方々に温暖化対策の出前講座を行ってもらうため、市町との橋渡し役や国と協力して温暖化対策のイベントをコーディネートしたり、業務は多岐にわたっています。

»この仕事のやりがい・おもしろさ

利益を求めず、県民、ひいては地球市民という最大公約数のために、環境について何ができるかを純粋な思いで考えられるところが魅力です。先輩方が「持続可能な社会の形成」というビジョンをまっすぐに見据え、熱い政策議論を展開されている姿を見るたび、入庁してよかったです。

それと、私の場合、国際環境法を学んだことが結果的にとても役立っています。国際的な議論の経緯や、世界・国家レベルでの取り組みの構造を知っていることで、地球規模の問題に対しても地方行政の役割をはっきり自覚することができるからです。「だからこそ、私たちが地球環境問題に取り組まなくてはいけないんです」と県民の方々に自信を持って言えます。

滋賀県の企業は環境問題に関心が高く、ビジネスの中でもどう取り組めばいいのかを考え、すでに具体的に形にされているところも多いんです。そういう企業の実情を把握し、行政として上手にサポートし、より理想的な環境社会形成に取り組んでいきたいと思っているところです。県職員は地元企業の方や県民の方々に直接会う機会も多いので、実際に今何が大事なのか、何をすべきなのかを肌で感じられます。その現場の空気を知ったうえで環境政策を考え、制度改革など大きなことにもチャレンジできる。その視野の広さが、この仕事の楽しさです。

»目指す人たちへのアドバイス

大学院で水資源問題を研究したいと教授に話した時、「水資源なんて学問になっていないし、やめた方がいい」と反対されました。でも、あくまで自分自身の興味に従って水資源問題を選びました。最近になって水資源問題が気候変動とリンクして議論されるようになり、結果として院生時代の研究が仕事にも役立っています。現実や将来などあまり気にせず、素直に今の自分が興味をもつ方へ進んでいけば、必ず将来につながっていくのではないかでしょうか。

#05 バイオマス研究者

Research Scientist

新エネルギーである バイオ燃料の 実用化を目指します

独立行政法人 産業技術総合研究所 バイオマス研究センター 研究員

»この仕事に就いた経緯

数学が好きで、機械をいじるのが好きだったので工学部に行きました。本当は機械か電気を専攻したかったのですが、合格したのは物質工学科応用化学コース。希望と違う学科で見つけたのが、化学工学という機械と化学の中間に位置する学問領域でした。なかでも、化学反応熱を空調や給湯に利用しようというケミカルヒートポンプの研究室に興味を持ちました。化学反応をつきつめていく研究ではなく、化学反応を産業に展開するこうした研究の方が、自分のやりたいことに近いと感じたんです。そのまま博士課程まで進み、修了後は、産業技術総合研究所のつくばにあるユニットでポスドクとなりました。その後、広島にバイオマスの研究グループができるというので移り、研究員となって今に至ります。

»現在の仕事内容

バイオマスエネルギーは、石油や石炭などの化石燃料ではない、動植物由来の燃料です。サトウキビやトウモロコシで作るエタノールもその一例ですが、それらは食糧と競合してしまいます。当センターでは木や稲わらといったリグノセルロース系バイオマスといわれる、食糧と競合しないバイオマスを中心

にバイオ燃料製造技術の開発に取り組んでいます。

私の仕事は、バイオ燃料の経済性や環境性を評価することです。経済性というのは、この方法ならいくらで作れるとか、プラント(大規模生産設備)を建てたとして何年で回収できるとかを検討することです。新しい変換方法を見つけて時間をかけて完成させても、できたガソリンが1リットル1万円なら売れないし研究が無駄になってしまいますよね。同様に環境性は、バイオ燃料が本当にCO₂を減らす効果があるのか検討します。もともと木はCO₂を吸収して育つので、それを燃やしてCO₂に戻しても大気のCO₂濃度は変わらないからカーボンニュートラルと言われています。でも、木を燃料に変換する段階で化石燃料を投入してしまうと、本当にCO₂が削減されているのか疑わしくなります。だから事前にシミュレーションして、本当にCO₂を削減できるのか、経済性は大丈夫かといったことを定量的に評価して、研究を無駄なく効率的に進められるようにしています。

»この仕事のやりがい・おもしろさ

バイオ燃料を実用化に近づけられることが仕事のやりがいです。以前は、学術的に画期的な研究でも、産業として社会に出した時にどれくらいの価値があるのか見えていませんでした。最近は学会での発表に対して「発想は良いけど、経済性や環境性はどうなんですか?」と質問が出るようになりました。評価システムの重要性を広められたのかなとうれしく感じています。

エネルギーと環境という、地球規模の問題に取り組んでいるという意識はありますし、それもモチベーションの一つです。ただ、単純にエコをいいものだとするような風潮には疑問を感じています。バイオ燃料も、製造過程によっては環境に必ずしもいいとは言えないわけで、そういうことを考えていると、「環境を考えています」という漠然とした定性的な言い方はしたくないなと思います。

»目指す人たちへのアドバイス

広く深く、まんべんなく勉強するのが一番だと思います。でもそれはなかなか難しいかもしれません。だから、最低限必要な知識は身につつつ、何か夢や目指すべきものがあるなら、それに必要なことや得意なことをつきつめるのも、一つのやり方としては良いと思います。夢をかなえるためには何でもやらなくてはいけないけれど、全部できなかったからといって夢をあきらめてほしくないです。

#06 測定技術者

Measurement Engineer

空気や水の成分は 人体に直接 かかわる問題です

株式会社産業分析センター 環境調査部

>>この仕事に就いた経緯

中学生の頃から理科の実験が好きでした。自分でやったことで結果が出るのが楽しいんです。失敗してもどこか違っていたのか考えられるし、座って先生の話を聞くより手を動かしたほうが身につく気がします。バイオテクノロジーを学ぶ専門学校を選んだのも、授業の6割が実習だと聞いたから。実際、学校では細胞融合やタンパク質の抽出などいろいろな実験をしました。その時に学んだ実験器具の扱い方や試薬計算などは、今の仕事でも役立っています。

やりたい分野はコロコロ変わりました。青いバラのニュースを聞いた時は植物の研究者にあこがれたり、DNAコースの授業を受けてからは遺伝子解析の仕事がしたいと考えていました。今の会社にインターンシップで来て、プラスチックに含まれる難燃剤の測定を担当してからは、日常生活にかかわる環境の分野がおもしろくなり、この会社に就職しました。

>>現在の仕事内容

水や大気などに含まれている物質を測定・分析する会社で、大気の測定を担当しています。仕事は主に3つ。「室内空気環境測定」では、新築・改築後の建物の空気に、ホルム

アルデヒドやVOCなどシックハウス症候群の原因物質が含まれていないか調べます。「作業環境測定」では、有害物質を扱う工場や作業所の空気に含まれる有害物質の濃度を測定します。これは、有害物質を扱う作業所が半年に一度行うよう、労働安全衛生法で定められている測定なので、定期的に行います。「臭気分析」は、工場から出る悪臭がどれくらいの数値で、近隣住民にどんな影響があるか分析します。どの仕事でも、サンプルの採取班が集めてきた空気に処理を施して機械にかけ、必要な数値を出してレポートにまとめる作業をします。空気は時間が経つと成分が変わってしまうので、1日に何十もサンプルが来ると長い残業が必要なほど忙しくなりますが、休日出勤はほとんどありません。

>>この仕事のやりがい・おもしろさ

環境や人の体に直接かかわる仕事なので、責任が重い分、やりがいもあります。前処理やレポートの記載時にケアレスミスをしないよう気をつけています。また、一つの作業所の空気を定期的に測定していると、前回とまったく違う数値が出ることがあるんですね。その理由を考えるのもおもしろさの一つです。サンプルには、採取した状況のレポートがついています。機械の配置、作業員の数、窓の開閉、温度や湿度などの要素から、「窓が開いて風向きが逆になったから空気が変わったんだな」とか予想するわけです。

最近は、仕事に必要な知識や勘が身についてきた実感があつてうれしいですね。機械の温度をこれくらいに設定すれば物質がうまく分離してきちんとした数字が出るはずだとか、そういう感覚が備わってきました。でも私はまだまだ。先輩はサンプルを見ただけでアスベストが入っているかわかったり、臭いを嗅いだだけで濃度を当てたりするんですよ。

>>目指す人たちへのアドバイス

私はどちらかというと化学より生物が好きなのですが、仕事で使っているのは化学の知識です。だから化学が好きな人に向いていると思いますし、化学の勉強をきちんとやっておくといいでしょう。専門学校には、高校時代に文系だった人もけっこういましたが、化学の基礎から教えてくれるような授業を受けて、卒業する時には一人で実験ができるようになっていました。あと、会社に入ってすぐに仕事に慣れたいなら、実習の授業が多い学校を選ぶといいと思います。知識だけなら、会社に入ってからでも本で勉強できるので、実際に手を動かして実験する経験が役に立つはずです。

#08 環境経済学者

Doctor of Economics

自然を守りながら 経済を発展させる方法を 経済学の視点で探る

専修大学 商学部 准教授

»この仕事に就いた経緯

出身が兵庫県尼崎市で、大気汚染が深刻な地域が家の近くにありました。だから、工場の煙や自動車の排気ガスに苦しむ人がいることは子どもの頃から知っていました。それとは関係なく、大学では経済学部に入学。戦後日本の高度経済成長に興味を持ちました。一度は就職したのですが、もっと経済成長論を学びたくて大学院へ。しかし、経済成長を追い求めるほど環境問題が深刻化する、貧富の差も拡大するという状況を考えた時に、経済成長論を主体とした経済発展のあり方に問題があるのではないかと疑問を抱き、幼少期の経験と重ねて公害問題を考えるようになりました。研究を始めた頃は、尼崎市を事例として、経済学の視点から、公害被害者に対する補償制度の課題や改善点を分析していました。

»現在の仕事内容

環境経済学は、環境問題が経済活動を原因として起きているという前提で、環境問題を解決するための経済的な手法や政策手段を研究する分野です。例えば環境税。汚染物質を使うほど税金が高くなるシステムにすれば、企業に環境保全の意思がなくても汚染物質の使用量を減らせます。つまり、課税が環境保全を促進するツールとなるのです。または補助金。環境保全的な活動をする企業にお金を与えたり、低金利で融資をしたりして、環境にいい技術の使用を促進します。環境評価といって、地域がもつ自然環境の価値を査定し、自治体の政策立案に利用するという方法もあります。

しかし研究を進めていく中で、私は、近代経済学にも問題があったと考えるようになりました。なぜなら経済システムを「生産→消費」の枠組みだけでとらえてきたからです。無限にあった「資源」、地球が吸収してくれた「廃棄」は、お金がかかるので無視してきた。でも資源の使いすぎ、廃棄のしそうが環境問題の根本なのですから、「資源→生産→消費→

廃棄」とトータルで考える必要があるわけです。だから現在は、近代経済学の問題点を明らかにしたうえで、持続可能な発展を構築するための経済学の理論体系を研究しています。

»この仕事のやりがい・おもしろさ

環境対策はお金がかかる問題です。企業の努力だけでは難しい。政府の財政改革も必要です。この混沌とした状況で、環境経済学者がどうかかわっていけるのか。学者はものごとをゆっくり考える時間をいただいているわけですから、何らかの形で環境問題に取り組むことが責務だと考えています。

もっとも、経済学だけではこの大きくなった経済活動を制御することはできません。工学、医学、法学など他の分野の学問と知恵を出し合って、環境を保全しながら経済の質を高めるための仕組みを提言していくのが今後の課題。地球環境は限界に近づいていますが、今ならまだ取り返しがつくかもしれない。そこに希望を持って環境経済学を続けています。

»目指す人たちへのアドバイス

今、大学や大学院の門戸は広くなる一方で、研究者は非常に就職難です。また、運よく研究者になっても、結果はなかなか出ないもの。安直に研究の道をすすめることはできません。でも、本当に環境経済学の研究者になりたい人がいればぜひともやってほしいですね。その時大切なのは、どの先生に教わるか。基本的に大学の先生は、学ぼうとする学生に親切なので、積極的にコンタクトをとるといいでしょう。

研究者にならずとも、環境経済学の視点は大切です。なぜなら、自然が提供してくれるもので私たちはいろいろな生産物を生み出し、経済活動を行っているのですから。環境経済学の視点は、例えば自治体に入って政策を立案する時や、企業で商品開発をする時も役に立つはずです。

環境にかかわるテーマを わかりやすく楽しく 伝えられるのが魅力

株式会社トド・プレス 月刊『ソトコト』編集

»この仕事に就いた経緯

高2の時、9.11(アメリカ同時多発テロ事件)が起き、非常に衝撃を受け、国際協力や平和に興味を抱くようになりました。それで国際学部へ進学し、平和学のゼミを選択しました。ただ、実際に学んでいく中で、机に向かって勉強するだけでなく、もっと自分が主体的にかかわっていけることがやりたくなつて。で、どうしようかと思っていた矢先、ある教授の「環境破壊も戦争と同じくらいの被害を人々にもたらす」という言葉が心に引っかかったんです。ちょうど大学2年の夏、タイやカンボジアをバックパック旅行した頃で、世界の貧困、環境についても気になり始めました。そこで、同じ学部に環境問題に対して具体的なアクションを起こしている辻信一教授のゼミがあつたので、そちらへ移りました。

ゼミを通して、社会事業家や環境NPO／NGOの人たちと数多く出会い、「環境分野って地味かもしれないけど、おもしろいことをかっこよくやっている人がいっぱいいるな」と知りました。環境に関する情報発信をしている雑誌、『ソトコト』の編集部なら、より広く環境について学べると思い、アルバイトをさせてもらうことになり、卒業後、編集アシスタントを経て正社員になりました。

»現在の仕事内容

『ソトコト』編集部員は8名。月にもりますが、毎月20ページほど担当し、与えられたテーマをもとに情報収集し、企画にまとめ、取材して記事にしていきます。テーマはエネルギー、環境NPO／NGO、エコツーリズム、食などそのつど変わります。もちろん、自分が興味あるテーマで記事を作成することもあります。例えば、今年1月に取り上げた水問題がそうです。毎日5000人近い世界の子どもたちが水に関する病気で亡くなっているとか、貧困の原因の一つに水問題があることが気になっていました。日本でも水道パイプの老朽が深刻化

し、問題になりつつあります。そういった最新の水事情を伝える記事をまとめました。ただ、ニュースっぽい記事の羅列だけでなく、全国の水道料金、河川の水質、名水などをデータ調査して独自に作成した「水ランキング」も掲載しました。こういうデータによってより身近な感覚で水問題に興味を持つてもらえると思ったからです。

本誌以外の業務としては、『ソトコト』が協力しているラジオ番組の企画や、隔月刊で出している中国版ソトコト『楽活』の編集協力も行っています。

»この仕事のやりがい・おもしろさ

雑誌なので、環境問題を様々な切り口で面白く、かっこよく伝えることができる。そこに魅力を感じています。以前、環境団体で働く知り合いに「『ソトコト』は、環境の楽しい部分だけを伝えている」と言われたことがあるのですが、雑誌はそれでいいんじゃないかなと思っています。なぜなら楽しくなければ、興味喚起はできないからです。おもしろいから人は関心を抱き、実際に何かやってみようと思うもの。だから、これからも環境をかっこよく雑誌で伝えていけたらと考えています。

»目指す人たちへのアドバイス

大学時代からフェアトレードをしている人や社会事業家に会いに行ったり、海外でファームステイしたり、環境系イベントに足繁く通ったり。とにかく気になったら何でも直接見に行きました。ネットでの情報収集も必要ですが、実際に環境にかかわる人々に会うと刺激も受けるし、俄然、視野も広がります。また、『ソトコト』では毎回、様々な切り口で環境を取り上げるのでぜひ参考にしてください。記事を読みながら、自分の好奇心がどんな環境問題に引っかかるのか、探ってみるのもおもしろいと思います。

#10 自然農園主宰

Natural Farmer

農こそ人間が自然を最も身近に感じられ、共存できる場です

雑草屋

小松 学氏

こまつ・まなぶ●1976年生まれ。福島県立磐城高校出身。筑波大学第三学群国際総合学類卒。26歳で農の道へ。05年より屋号「雑草屋」として茨城県つくば市で自然農に携わり、現在は誰もが気軽に自然農を体験できる「つくし農園」も主宰。

»この仕事に就いた経緯

大学卒業後、産業廃棄物のコンサルティング会社に就職。工場から排出されるゴミや廃棄物を再資源化するためのコンサルティング営業に携わっていました。廃棄物処理に興味を持ったのは大学2年夏の中南米旅行がきっかけです。移動中、何度も石油製品のゴミが山積みにされているのが目につき、ものすごくショックを受けました。当時、環境問題が気になり出した頃だったのであって、CO₂削減とか森林破壊よりももっと身近な課題として、まずゴミをなくすことが先決、大事なのではと思い、その会社に入りました。

転機が訪れたのは入社3年目。たまたま夏休みに訪れた長野県安曇野のペンションで、自然農の畠に出会ったんです。農薬も肥料も使わず、耕すこともしていない雑草が生い茂る畠の中に、野菜がすくすく育っている。それを見た瞬間、環境系の会社で「環境を守ろう、地球を大切に」と言いながら働いているけれど、もしかしたら自然の本質を実は何も知らずに、勝手に自然を語っているんじゃないかな、畠にこそ人間と自然が共存する理想の在るべき姿のヒントが隠されているのではないかという気がしました。それで会社を辞めて自然農へ

転身しました。自分のやりたい環境の仕事はまさに自然農の畠にある。そんな直感もありました。

»現在の仕事内容

自然農をテーマに各地の農園を見てまわって勉強し、06年より学生時代から親しみのあるつくば市で「つくし農園」を開園しました。自然農はできる限り自然の力に任せる農法です。農具も鋤と鎌のみ。環境や天然資源に負荷のかかる農薬や肥料も使いません。雑草の光合成は土に養分をもたらし、虫や草の多い土は健康な野菜を育ってくれます。だから、毎日畠に出ていますが、草の管理や種まきも最低限に抑え、過度に手を入れないようにしています。収穫したものは定期市などで販売しています。また、一般の人たちに自然農を体験してもらう機会を提供するといった活動も行っています。

»この仕事のやりがい・おもしろさ

畠の様子を見て、加減を考えながら草を刈り、種をまいたり苗を植える時期を考えます。同じ畠でもその年の日当たりや土の条件によって、作物のでき具合も全然違います。でも、どんな結果も受け入れていくしかないのがこの仕事のおもしろさ。例えば、作物が育たず枯れてしまった。でも、それは失敗でも何でもなく、そこで起こったことをまるごと受けとめて次を楽しんでいくしかないわけです。畠とやりとりしながら一緒に前に進んでいく感じかな。新しい畠に移ってからは2年目なのですが、あと10年ぐらい続けたら、地球と人間の付き合い方みたいなものが感覚としてつかめてくる気がしています。抽象的な言い方ですが、実際に土に触れ、雑草たちと接しているだけでいろんな気づきを得られます。環境問題を考えるうえで一番大切なことを、体で感じさせてくれるのが自然農だと思っています。

»目指す人たちへのアドバイス

環境とか社会貢献とかを考える前に、人類が何千年も前からテーマにしていて、いまだに解決できないでいる哲学や生命科学などに一度没頭してみるといいと思います。物事を大きくとらえられるし、大きな夢を抱けるようになって人生も楽しく豊かになると思います。それらの類の本も数多く出ています。

農を学ぶうえで一番大切なのは、「習うより慣れよ」です。頭でっかちに「農法」を学ぶよりも、実際に田畠に立って作物と過ごす時間こそが、自身の経験となります。近くの農園を体験したり、農家の手伝いをしたりなど、実際に土に触ることで自分の進むべき道が見えてくるはずです。

